

平成18年度 教師海外研修（派遣国：マレーシア）実践報告書

1. (タイトル) 『外国のことを知ろう』

2. (氏名) 水野 証

(学校名) 滋賀県立新旭養護学校 (担当教科) なし (免許教科は「社会」と「養護学校」)

3. (実践教科) 総合的な学習の時間 (時間数) 4時間を予定 (現時点で2時間終了)

12月18日現在

4. (対象生徒・学年) 高等部課題別 (A1グループ) * (対象人数) 8名

* A1グループ：1年生～3年生。発達的には話し言葉を日常レベルで駆使し、書き言葉への導入・充実を課題とする段階。障害種別は多様だが、いずれも知的障害を持つ。企業就労等の形で社会参加を目指す生徒たち。

5. カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・教師海外研修で得た教師の体験を伝えること。
- ・国際社会、国際援助、環境、文化といった概念の形成が十分ではない生徒が多いため、そうした内容を直接教授するのではなく、日本の感覚からすれば「不便」と思えるダガット村の生活の様子を伝えることに主眼を置いた。

生徒がイメージする「外国」とは、多くの場合はテレビなどで触れる白人を中心とした文化の断面であることが多い。授業の中で明らかにできたことだが、生徒たちには国という概念自体にまだ相当な揺れがあり、それが地理的および行政的に区分され、それぞれが独自の歴史と文化を有し、さらにまた一国の中にも民族的・文化的多様性を内包するという概念は十分に整っていない。地理という概念も行政という概念も未熟であり、それらによって既定さる「国」という概念もまた未熟である。

しかし、今般の授業ではこうした未熟さにアプローチするような体系的な授業時間は確保できなかった。そこでダガット村の様子を知ること、自分が村に行ったときにどういう態度や力が必要になるか (大切なもの・こと)、日本から限られた物を持って行けるなら何を携えるか・・・といういった内容を考えさせた。未知を想像し、その未知の中に自分が入っていくことをイメージしてほしいと思った。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>【1時限】(10月18日)</p> <p>・「君の大切なものは？」</p> <p>・ダガット村の暮らし</p> <p>・「君ならダガット村に何を 持っていく？」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の様子などはある程度事前に担任から聞いていたが、指導者自身としても把握するため授業の導入部でいきなり「大切なもの・こと」を質した。自分が答えたことが授業の中でどう使われるのかに興味をもち、授業にさせることができた。「自分にとって大切なもの」には所謂正答はなく、能力の差に関係なくどの子も考えることができる。 ・ 次に「いま、みんなが答えてくれた大切なものがあるか探してほしい」と促しながら、ダガット村の様子を伝えた(主には語りで。また写真などを用いながら)。(急な授業だったのでビデオ等が準備できなかったのは残念)。 ・ ダガット村のイメージを定着させるための質問を受け付けた。質疑を通してダガット村を紹介した。 ・ 次に「電気もガスも水道もないダガット村に行くとしたら、何を持っていくか?ただし、持てるのは小さな鞆ひとつだけ」という発問をした。 *急にもらった授業だったため準備不足否めず。第1回はこれで終了。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アジア地図 ・ ・ ボルネオ島の地図 ・ ダガット村で撮影した写真等 ・ 回答シート
<p>【2時限】(11月13日)</p> <p>・「自分がダガット村に持って行く物」の発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の授業で考えた「ダガット村に持って行く物」とそれが必要と考えた理由を、全員に公開して、各自に「理由」についての追加のコメントをさせた。 (自分の意見がペーパーで公開されることを拒否した生徒1名。) 	
<p>【3時限】</p>	<p>未実施・期日未定</p>	
<p>【4時限】</p>	<p>//</p>	

(3) 授業結果 (概括)

授業の導入で聞いた「大切なもの」の回答は次のとおり。いわゆる「教科書的な模範解答」と「極めて即物的な回答」が返ってくることを予想したが、ほぼ予想どおりだった。

授業者の意図としては、ダガット村に自らが行くことをイメージし、「未知に入っていく自分」にとって「何が大切か」。いわば、そうした環境で自己実現するために大切なものは何かというところに導きたいと思っているが、2学期は結局2時間しか時間が取れず、授業はまだそこまでいっていない。

<生徒の回答>

～大切なもの～

- : ケイタイ、腕時計 (外にでるときにないと困るから)
- : 家族 (家族がいなければ、ここまで育っていない。家族は応援してくれる)
友達 (友達がいなければなんにもできない)
命・お金 (いのちがなかったら、今の私がない。お金がなかったら何も買えない)
- : 命 (最近のニュースでイジメの自殺や、変な人に殺される人がいて、命はやっぱり大切だと思った。だから、命を捨てることを考えずに頑張って生きたい。)
友達 (おちこんでいる時にはげましてくれる)
恋愛 (苦しい時、泣き続けている時に優しい言葉をかけてくれる。心の支えになってくれる)
- : 家族 (自分の居場所、帰れる場所)
友達 (友達がいることでシアワセ。自分自身でいられる)
兄弟 (心の支え、癒される)
- : CD (大切な人からもらったから)
お金 (どこかに行ったり、物を買うため)
大切な人
- : 家族・友達 (・・・)
金 (生活のため)
あそぶもの (暇つぶし)
- : 友達<または、先生> (相談できる)
お母さんと妹 (今までずっと一緒にいたし、これからも居られるから)
高等部の仲間 (毎日会っているし、本当に楽しい)

～ダガット村に持っていく物～

- ・ ナイフ (食べ物を切る)、ロープ (火をおこす道具をつくる)、服や下着、コンパス (方向)、缶詰 (腐らない)、水 (飲料水) マッチ、寝袋、釣り竿、絢香のCD、カップヌードル (メッチャおいしいから) 宇多田のCD、電池 (CDを聴く)、思いでの写真、本、・・・・・・
- ・

△ 上記以外で私が注目した答え

紙と鉛筆 (村の人と会話しないと生きられない)、勇気や自信、仲良くなろうという気持。

「大切なもの・こと」についての答えは概して“模範解答”が多くて、生徒の発達段階や

障害種別による違いはあまり見られなかった。これに対し、イメージを「ダガット村に行く」に限定して発問した場合には、発達段階や障害種別による違いが見られた。広汎性発達障害（自閉的傾向）も持つ生徒は“具体的な物と自分”という二項関係、コミュニケーション障害ではない知的障害の生徒は、“自分と村人との関係の中で必要な物”という三項関係の中で答えを模索したと言える。

（４） 授業の感想（と反省）

とてもいい加減な授業しかできなくて申し分けなく思っています。担任や各教科の先生との時間調整がなかなか難しく、また、自分自身も非常に多忙だったため思ったように授業時間を確保することができませんでした。3学期にも時間が取れないか担任と話してみます。

さて、授業に際して考えたこと、授業の後に感じたことを振り返ってまとめて代えたいと思います。

「大切なもの？」という問いは、「openな問い」だと思っています。一方「ダガット村に何を持って行く？」は比較的「closeな問い」です。問いがオープンであるほど答える側の難度は高くなります。特に知的障害を持っている人は経験も狭く、「何を答えてもよい」「何を話してもよい」というポジションに立たされることが苦手です。そこで「良く見られたい」という当然の自意識が働いて、とても模範的な回答が出てきます。「良く見られたい」という自意識より自分の「本当の思い」を優先させた子（あるいはその自意識の発達が幼い子）の答えは即物的です。ある意味で素直な答えです。

もう少し発達的に幼い子どもを例に言いますと、「何がほしいの？」「何がしたいの？」という問いでは子どもはますます混乱していきます。少し先の時間をイメージすることや、何となく思っていることを明確なものにして伝える力の発達が幼いからです。これが「openな問い」です。

一方、「お茶か、ジュースか、どっちがほしいの？」とか「ボールあそびか、自転車乗りか、どっちがしたいの？」と答えの内容を予め限定して聞いてあげると、子どもは比較的簡単な二者択一で自分の気持ちを言うことができます。ほしい物がお茶でもジュースでもない場合は、子どもはどちらも拒否します。教師はまた別の物を提示します。答えの範囲を予め限定してから発問してあげる。これが「closeな問い」です。

「大切なもの・こと」は、ダガット村のことを伝える前に聞きました。答えの範囲やテーマを限定しないととてもopenな問いです。答えるのが難しい反面、子どもの生活的な背景や文化的な素地が出てきます。

一方、「持って行く物」はダガット村というイメージに限定させて（close）発問しました。答えから生徒たちの思考の在り様が伺えます。

「大切なもの・こと」という極めてopenな回答自由度の高い問いでは、上に紹介したような答えです。家族・友達・命（愛情、友情）というイメージのグループと、お金、ケイタイ、あそぶもの・・・といった即物イメージに分類できます。愛情・友情イメージはもちろん、本当に大切な“もの”“こと”を答えているという意味では100点満点の模範解答だと言えます。しかし、冒頭で述べたように「国・社会・環境・・・」といったことに対するイメージがまだ未熟な彼らです。そんな彼らが「大切なもの」として「愛情や友情」と答える

時、彼らの中にどんなイメージが膨らんでいるのでしょうか。私が授業で迫りたかったことは実にこの部分です。

家族、友達、愛情・・・いずれもパーソナルな要素が強い答えです。社会、国、環境、自然、人々、文化というソーシャルな要素の答えは見あたりません。これは養護学校の高等部の軽度知的障害の子どもたちに共通する傾向だと思います。障害児に限らず、今の子どもたちに共通しているかもしれません。

最大の原因はテレビだと思います。テレビのドラマや流行曲は生徒が最も親しんでいる文化です。ドラマの多くは男女の関係を中心にした愛情問題、それに家族の問題や友情の問題を絡めてエンターテインメントに仕上がっています。子どもたちがこよなく憧れる美形アイドルたちを媒体にして、それらは大量に子どもたちの意識の中に入っています。

「大切なもの・こと」という問いに、愛情・友情、恋人・家族・友達といった系のものを選んだ生徒たちは、人生の経験を踏まえてそれが大切だと言っているというよりも、まだまだテレビ文化から得た表層的なイメージを表現しているに過ぎないと思います。

愛情・恋愛・・・等のパーソナルなものに比べて、社会・環境などのソーシャルなものに大切だと感じさせる文化的背景が乏しいということが大きな要因だといっていると思います。これはテレビ文化の偏りでもあり、日本社会の偏りでもあります。テレビ文化の偏りに抗しきれていない私たちの学校教育の問題でもあります。教師自身がパーソナルなものにどっぷり浸って、社会的なものへの眼差しが弱くなっているという面も否めません。

私が授業を通してやってみたいと思ったことは、ダガット村や村人の暮らし、あるいはボルネオ島の自然破壊ということを学んだ後で、生徒たちの「大切なもの・こと」の答えにどうい変化が出てくるかということです。

ただし、一般に人間関係の中で傷つけられる経験の多い彼ら彼女ら、軽度の知的障害をもった子どもたちは感性が豊かで優しいです。つまり授業の中でも彼らは教師に気を遣い、教師を傷つけないように心を配ります。環境問題の授業の直後に質問しても、生徒たちは教師の授業意図を思いやって「自然環境が大切だ」と答えたりするだろうと思います。そういう意味でも少し時間をかけてみたいと思います。担任から授業時間を譲り受けて3学期にこの続きの授業をやってみたいと思っています（できるかな？）。

お粗末ですが、とりあえず提出期限ですので「中間報告」ということでお願いします。